

岡本章庵『北地国防論』『北地海防論』について（上）

有馬 卓也

目次

はじめに

第1章 『北地国防論』『北地海防論』の主張

第1節 西欧の東洋侵略

第2節 千島・対馬・八重山の現状

第3節 現状への対応

第2章 『北地国防論』翻刻・訳註（以上、本集）

第3章 『北地海防論』翻刻・訳註

おわりに

はじめに

明治二四年、岡本章庵は千島の択捉・色丹・得粒を視察し、さらにその足で札幌へと赴き、組織的な千島移民・拓殖をめざす千島義会を立ち上げた。そして精力的に活動を続け、翌年千島へと出航するが択捉沖で座礁。さらに国会へ提出した請願も否決され、千島拓植の夢は露と消えた。この明治二四年から翌二五年にかけて、岡本

は以下の八点の文章を残している。

1. 『千島日誌』（明治24～25・漢字片仮名交じり文・写本）

— 徳島県立図書館蔵・目録番号二三八～二四二

○ 明治二四年五月一〇日～九月八日、及び明治二五年五月二六日～七月七日の日記。千島（色丹・択捉・得撫）及び北海道（根室・標津・斜里・網走・札幌・岩見沢・石狩・小樽・函館など）の調査記録。

2. 『千島義会設立当時の日記』（明治24～25・漢字片仮名交じり文・写本）

— 徳島県立図書館蔵・目録番号五二八

○ 明治二四年九月九日～二五年三月一九日の日記。入会希望者の記録が中心。

3. 『千島義会規則及予算表』（明治24・漢字片仮名交じり文・印刷物）

— 徳島県立図書館蔵・目録番号五四四

○ 千島義会の趣意書・規則・予算表の最終案に近いものと推定される。予算表の原型は『千島日誌』の八月三一日に見える。

4. 『北地国防論』(明治24・漢字片仮名交じり文・写本)

— 徳島県立図書館蔵・目録番号五二〇

○日・清・朝の三国が置かれた国際的状况について論じた上で、西欧列強の中でもイギリス・ロシアの侵略手段を論じ、国防の重要性を説く。

5. 『北地海防論』(明治24・漢字片仮名交じり文・写本)

— 徳島県立図書館蔵・目録番号五一二

○国防上、重要な拠点である北海道・千島・対馬・八重山の現状を述べた上で、海利による殖産を説き、当該地域への移民を主張する。

6. 『千島拓植要領』(明治24・25・漢文・写本)

— 徳島県立図書館蔵・目録番号五二八

○北海千島拓植要領・移住抗義・対馬大島之事状・西南諸島之拓殖の四節よりなる意見書。

7. 『千島見聞録』(明治25・漢文・刊本・非売品)

— 国立国会図書館蔵・近代デジタルライブラリー

○前半は千島二四島の地勢報告書。後半は附録として漢詩を掲載する。

8. 『千島諸島の現状』(明治24・漢字平仮名交じり文・刊本)

— 北海道大学附属図書館北方資料室蔵・旧記一二三三・『東邦協会会報』所収

○千島の現状を示すとともに、明治初期の樺太における日露交渉史について詳細に論じている。最後に千島開拓意見十五條を載せる。

筆者はこれらの資料のうち、1については「岡本章庵『千島日誌』

翻刻」(徳島大学総合科学部紀要言語文化17, 2009)及び「千島日誌」に見える岡本章庵の北方移民論」(徳島大学総合科学部紀要18, 2010)を、2・3・8については「岡本章庵関連資料(3)」(徳島大学国語国文学23, 2011)において翻刻を、7については「岡本章庵『千島見聞録』訳註」(徳島大学国語国文学22, 2009)を発表した。

本稿では4の『北地国防論』及び5の『北地海防論』について、まず第一章で両書の概要を紹介し、その主張を解析してみたい。さらに、第二章・第三章で両書の翻刻・訳註を提示する。

なお以下、1『日誌』、2『日記』、3『予算表』、4『国防』、5『海防』、6『拓植』、7『見聞』、8『現状』と略記する。

第1章 『北地国防論』『北地海防論』の主張

『日記』を見ると明治二四年の九月一七日、十一月八日、一五日、一二月一三日、二〇日の五回にわたって演説を行ったことが記されている。このうち九月一七日は東邦協会における演説であり、この時の演説を起こしたものが『現状』である。以下、十一月八日は林祥院厚生館、十一月一五日は水産会、一二月一三日は地学協会、一二月二〇日は能弁会での演説と記されている。

これらの演説は北方の開拓と海防の必要性を説くとともに、千島義会設立に向けての資金集めも目的として行われたものであろう。岡本の千島義会の最大の問題は資金面にあり、『予算表』によれば準備費用(初年度支出)として五万円が計上されているが、これは当時にすれば相当な金額であって、そのための特別賛成会員①の五〇円以上という義金がさらに入会希望者の足を遠ざけるとい

悪循環をもたらしている。『予算表』に掲載された特別賛成会員は、井上円了・石黒忠憲・鳥尾小彌太・奥並継・川田剛・吉野世経・谷干城・副島種臣・村田保・久米軒文・松平信正・秋月胤永・三島毅・島田重礼・重野安禪ら一五名にすぎず、目標金額に遠く及ばなかったであろうことが容易に想像できる。明治二六年に占守島への移住を敢行した郡司成忠(2)の報效義会も資金面がネックとなり、それ故の短艇渡航であった。明治政府が両者に対して資金援助を行わなかった理由として、外交上においてロシアを刺激することを避けたからという見方もある。

さて、『国防』『海防』いずれもイギリス・ロシアを中心とした西欧列強のアジア侵略の脅威を訴え、国防意識を高めようとする内容になっている。『国防』は「宗教家諸君の意如何」と聴衆に問いかける部分が見えることから、一月八日の林祥院(3)での演説原稿である可能性が高い。また『海防』は海利を強調し漁業における殖産を強調していることから、一月一五日の水産会での演説原稿の可能性が高い。さらに本原稿には岡本本人や校閲者（未詳）の注意書きが加えられており、そこに

「明天子」以下「悲むなり」までの文字、激に失す。若し新聞に公にせば、必ず奇禍あらん。改むべし。〔『海防』

「……」削るべし。若し陸海軍士をして之を讀ましめば、恐く先生を撃つ者あらむ。否らざれば法律に処せらるべし。〔『海防』などとあることから、新聞への投稿も準備していたようである（掲載の有無は未詳）。

以下、『国防』『海防』の主張を「西欧の東洋侵略」「千島・対馬・八重山の現状」「侵略への対応」といった視点から論じてみたい。

第1節 西欧の東洋侵略

まず、岡本が認識する西欧の東洋侵略の経緯と意図について見てみよう。『国防』の冒頭に次のようにある。

彼の欧州諸国が東洋侵略の勢は、恰も万量の怒濤が涌々として千里無堤の境を行くが如く、山を抜き雲を払ひ、進んで東印度を巻き、再進して香港・台湾を占め、三進して巨文島・濟州島を略せしに非ずや。既に是を略せり。而して彼等は此蒙爾たる巨文島・濟州島を以て將た何の用に供するか。彼等は是を以て軍艦停泊所と為す。砲兵工廠と為す。而して第四面進撃の根拠と為す。〔『国防』

西欧の三度にわたるアジア侵略（一進―東印度、二進―香港・台湾、三進―巨文島・濟州島）を述べ、次の第四進が日清朝三国への本格的侵略であることを示唆している。そして実際に三国のどこに侵行するのかと論を展開し、以下のように述べている。

三国の勢は……清唇たれば日韓齒たり。日韓唇たれば清齒たり。清中堅たれば日韓之れが翼たるは、是れ其大小伍置、自から然ればなり。蓋し兵家の兵を用ふるや、必ずしも直入中堅を衝かず、何れか一方薄弱なる点に向ひ、全力を尽して之れに当り、其羽翼を絶ち、而して後胴体に及ぶは敢て疑の容れざるなり。然れども此三国中、何れか強、何れか弱なるかは、容易に判断する能はずと雖も、小者の与みし易きは自然の理。而して亦薄弱なる点は多く羽翼の辺にありとす。然らば則彼等の運動上、最も便宜にして且与みし易きは、嗚呼、其れ日韓の二国なる哉。二国既に無ければ、支那羽翼なきなり。羽翼なければ鷲鳥と雖

も、痴兒能く之を撃す。(『国防』)

当時日清朝三国提携を唱える者の間でよく用いられた「唇齒」の比喩を用いて、日清朝三国は將に運命共同体であるとし、「二国(日朝)の運命は支那に先だつ。二国滅びざれば支那滅びず、支那滅びざれば東洋保つ可し。日韓の運命亦貴重なる哉」(『国防』)と言つて、それが東洋全体に影響を及ぼすと述べている。岡本のこの意識は『大日本中興先覚志』(明治三四、清・開導社)の西郷隆盛伝にも記されており、三国が協同して西欧にあたるといういわば初期アジア主義的な思想が展開されていると言つてよい。

それでは西欧とりわけイギリス・ロシアは具体的にどのような形で侵略していたのであるうか。これについて岡本は西欧のアジア侵略を経済侵略・軍事侵略・宗教侵略の三点から論じている。以下順を追つて見てみたい。

まず経済侵略についてはイギリスを中心に説かれている。たとえば以下のような文が見られる。

或は曰く「英は商業国にて東洋に関係すること尤も多く、我に利することも極めて広きがため、長く親みて露人を退すべきなり。」殊に知らず。英人の東方諸国を略するや、多方の奸策もて商業上の利を擡ほしめにし、長く治外法権を施さんとすること露人と相似ざるものあり。財貨を人に貸して其国を困窮せしめ、従つて其改かへりに関渉するなど歴々として誣ゆべからざるのことあるを、是安ぞ与くみすべきものならんや。(『海防』)

イギリスはロシアとは手段を異にし、奸計を用いた経済侵略を得意とすると述べており、恐らくは清国へのアヘン密輸などが念頭にあるのだろう。そしてこの経済侵略は軍事侵略にもまして危険なも

のであると述べている。

次の軍事侵略については、ロシアを中心として論が進んでおり、次のような記述が見られる。

蓋し東洋北門の敵は唯一魯西亞あるのみ。然れども此魯西亞なる敵が東洋侵略者中の最も強大にして且つ恐るべき者とす。(『国防』)

露人は我が国情を知るに従ひて、益ます跋扈し一雑夫が軍艦に在りて我に接するにも侮慢を極め、毫も顧忌する所なきほどなるに、……(『海防』)

露国は言ふまでもなく万国軍の海を蔽おほひて至り、大罪を声することあらんも知るべからず。深く寒心せざるべけんや。(『海防』)

岡本自身がロシアの樺太侵略をまのあたりにしていることもあり、ロシアに対する危機感極めて高い。さらにシベリア鉄道についても以下のような発言が見られる。

彼等は臨機応変の運動をなし、干戈を用ひざれば、則すなわち老狡なる手段を以て商利を占め、其怨を逞たくまふせんとするや疑ふべからず。是に於てか彼等は西伯亞内地の鉄道を利用し、日本海を以て良港とし、太平洋上に於て無限の商権を振はんとするや、亦疑ふべからず。(『国防』)

西伯里の鉄道は三五年を出ずして全く成功を告げんとす。甲薩克軍隊の烏蘇里地方に応援するもの一周日に過ぎずして、彼此に往來することを得ん。烏蘇里の地たる西は満州に連り、南は朝鮮に界し、東は大海に枕し、北は大陸を控き、位を我が土流に占めて数百千里の間に盤踞し、山川秀麗に土壤膏沃なること北海道に過ぎ、極めて耕牧に適し、露人が宝庫とする所たり。……露人が志

は固より南進して海上の大權を擡はたにするに在りて、意外に割
 処の地を得たるものなれば其地に生聚するものも常に侵略を以て
 性とし、数百里の山河を挙りて勇往堅忍の兵に非ざるものなきに
 至らん。『海防』

ここでロシアは軍事力を背景に経済的な侵略にも及ぶとしてい
 る。

最後の宗教侵略については、イギリス・ロシアのキリスト教によ
 るアイヌの困い込みが脅威として論じられている。これは色丹島に
 移住させられた千島アイヌや函館・幌別方面のアイヌの実状から、
 切実な問題として岡本に映っていたのであろう。この宗教侵略につ
 いては、『亜細亞之存亡』でも重点的に説かれている④。

『耶蘇教、彼れ自身は如何にも真面目しんめいもくを以て衆生を感化するに相
 違なしと雖、之を利用する彼政府の心こそ恐るべき者なるぞ。』『国
 防』

吾人が彼の希臘教ギリヤクの北海道に侵入せるを以て特更に憂とするも、敢
 て杞人の轍くわにあらざるなり。『国防』

そしてアジアの現状は以下の如きであると述べている。

東洋全土は殆んど彼等の怪物の舞台と為れる哉。『国防』

晨に英の苛法こほに困し、夕に魯の猛令まうれいに泣く者、其れ幾何ぞ。『国
 防』

英露が羸輸えいゆを争へるの結果は我国に於て活劇を現せんとす。高枕
 安眠すべき時に非ざるなり。『海防』

かかる現状に対し、岡本は

諸君、若し瓢箪ひょうたんを枕として秋津州裏の月に嘯うそぶかんと欲せば、
 先づ秋津島を安寧にせよ。『国防』

と訴える。

第2節 千島・対馬・八重山の現状

岡本が国防上重要な拠点と考えていたのが千島・対馬・八重山の
 各諸島であった。『海防』『拓殖』はこれらの島々の重要性を指摘
 し、聴衆の国防意識を高めようとするものである。

第1節で述べたような状況にあつて、政府は北海道・千島に対し
 ていかなる策を講ずべきかという問題にうつる。特にロシアと接す
 る北海道が国防上重要な位置を占めているにもかかわらず、それが
 放置されていると批判する。

我政局は夙むすに對馬島を以て前門の第一防禦線となし、或は分遣隊
 を置き、或は砲壘を築き、注意周到、更に吾人が喙くちばしを容るる
 の点なきも、独り北門の鎖鑰さぎょたる北海道に至りては、其鎖鑰に依
 て安眠する東洋人すら、否、日本人すら猶ほ一顧盼こくげいする者なきは
 何ぞや。『国防』

我が對馬島及び北海道は、彼等（ロシア・筆者註）が太平洋に出
 づるの関門にして、其ステーションたるや亦た疑ふべからず。左
 れば試にここ北海道を以て魯人の有に帰せりと仮定せよ。彼等は
 期年ならずして草莽そうぼうを披ひらかん。墾鉞けんえんを採らん。土人を懐なけん。艦
 隊を置かん。鐵道を布くこと、蜘蛛の如くせん。兵馬を養ふこと
 数万に至らん。『国防』

北海道・千島開拓の現状については、『日誌』が詳細に記す所
 あり、それについては拙稿『千島日誌』に見える岡本章庵の北方
 移民策で言及したので、詳細はそちらを参照されたい。

また對馬近海については、文久元年におけるロシアの對馬占領の

経緯を、ロシアの陸軍参謀官オノフの『一島未来記』に言及しつつ触れている。この事件があったことにより、明治政府の対馬対策はかなり進んでいた。これに反して対外対応の遅れている北海道が、一たびロシアの手に落ちてしまえば、という危機感をここに見てとることができる。当時の北海道開拓が著しく遅れていたとは思えないが、岡本のめざす対ロシア防衛のハードルはより高い所であったのであろう。『日誌』に示される北海道開拓への不満は、もっぱら北海道庁や明治政府の劣策に向けられている。

八重山を中心とした沖縄近海の諸島の開発は最も遅れている状況であった。これは約四年にわたって沖縄県庁に奉職していた谷口蘭田の四男復四郎の報告に基づくものである。以下のような記述が見える。

余嘗て琉球の属地なる八重山列島中に林莽穢雑して人跡の至らざる所多く、内地数万の人民を遷して其地を拓開し、砂糖等を耕作するときは漸く莫大の利益を起すべしとて、老友佐賀県の谷口藍田が男復四郎の其事に尽力したるを聞き、……。(『海防』)

この谷口復四郎(字は琴盧)については拙稿「有井進齋の人と思想」⑤の中で多少しく言及したが、ここではその際触れなかった沖縄開連のことについて補足しておきたい。明治十七年に三二歳で病没した復四郎の墓碑銘や行状(谷口中秋「琴盧谷口君墓碑銘」「谷口復四郎行状」)によれば、明治一二年七月に沖縄県令となった旧佐賀藩主鍋島直彬に従って沖縄へと赴いている。そして直彬の後任として上杉茂憲が着任した後も沖縄に留まり、明治一六年まで沖縄で奉職している。沖縄県民のために尽力し、「心を尽して撫恤す」「土人の信任する所と為る」(ともに墓碑銘)などと記されている。またこの間に宮古・八重山など諸

島を経巡ったようで、『蘭田谷口先生全集』(大正一三年、非売品)の巻五附録に収録された『琴盧遺稿』の中の「球遊詩史(前集・後集)」「巡島百首節」をひもとけば、復四郎がいかに精力的に各島に目配りしていたのがよくわかる。この時の見聞を岡本に語ったのであろう。そして、その内容が『海防』や『拓殖』の詳細な南洋諸島の記述に反映されている。

第3節 現状への対応

最後に岡本が具体的にどのような対応を考えていたのかについて言及しておきたい。これについては『海防』での水産業の振興による国力の増加の示唆と、国民への移住の呼びかけが中心となる。たとえば、水産業の振興について以下の如き記述が見られる。

我邦は四面みな海なり。海利は陸産に十倍するものと聞けり。而して我近海に漁獵の利多きは万国人の斉しく垂涎する所たり。苟くも国権をして海上三里外に及ぶものとせば、我邦疆域の広大な如何ぞや。況んや三里外に非らざるに於てをや。国益の盛大なる勝て言ふべけんや。(『海防』)

若干万円を房総・能越已北漁民の志あるものに貸して千島の各処に至り、若干万円を天草諸島漁民の志あるものに貸し琉球諸島に至りて漁業を営ましめ、無数の魚介を得て内地人の食料肥料に供し、其余を支那諸国に運往して之を売却すとせば、果して何如なる観を呈すべきや。(『海防』)

最初より官船を貸し、夏季は千島に向ひ冬季は琉球諸島に向ひて、人貨を運搬せしめたらんには、尤も成功を奏し易かるべし。(『海防』)

支那上海・漢口等の所にて販鬻せんには一区の地基を買ひ、日本町を置き、邦制粗造の家屋を営み、……（『海防』）

海利は陸産に一〇倍するといひ、夏期には房総・能登・越後以北の漁民を千島にて操業させ、冬季には天草諸島の漁民を琉球諸島にて操業させ、各地で得られた漁利を清国の上海や漢口などで販売して利益を得ると同時に、さらに当地に植民して日本町を置こうという案である。また移民・植民については、

幸に北海道の曠漠なるあり。氣候物産みな吾人に適せり。其地に徙住して耕漁の勞に服せば、数年を出でずして衣食の資を裕にし、子孫を長育することを得ん。安ぞ便法を設けて之を奨励せざるべけんや。（『海防』）

良法を設け北海に移住せしめ、全国の力を対馬・大島等の国防上に集め、千島の辺隅となく舟楫往来して大に進取の気を鼓舞するに非ずば、異人蜂起して兇行を逞たくましうし、政府国会も如何ともすべからざる勢あるに至り、国計濫出するの弊あらんことを恐る。

（『海防』）

といった北地移民を勧める記述が見られ、『日誌』の記述と一致する。注目すべきはこれを国家の支援のもとに行うべきであるという主張であり、ここから以下のような欧化主義批判に加えて、アメリカやオーストラリア移住政策批判も見られる。

奢侈を以て文明の兆なりと認め、衣食住を外国に模擬し、喪祭等に奢侈を極めて慮美を銜てひ、虚声を張り猿の人真似するが如くに、外人に及ばざるを耻づるものは、文弱怠惰の弊に陥りて文明の実を知るものに非ず。此の如くにして国家を亡せるものは、東西古今に其例も少からず。（『海防』）

耳に南北亜美理駕・澳斯多理等の豊饒なるを聴くも、意の如くに徙住すること能はず。他人の財本を仰ぎて移るものは奴隸の身たるを免がれがたし。（『海防』）

さらには、日本国民の「奮発有為の氣象に乏し」（『現状』）く、「窮鬼に撃ち勝つての精神に乏し」（『海防』）といった国民性を批判し、以下のような国民を鼓舞する主張へと繋がっていく。

全国人民が奮発有為の精神を鼓舞せしめ、官よりも保護を加へ、……（『海防』）

しかし、総じて精神論的な呼びかけが多い。たとえば以下の如くである。

先づ秋津島を安寧にせよ。汝の耕さんとする沃野は彼等の為めに耕され、汝の営まんとする功業は彼等の為めに先登せられ、汝が利せんとする商社は彼等の為めに籠絡せられ、而の後諸君は能く何をか為すや。（『国防』）

堂々たる帝王の臣民にして彼等の奴隸乎たるは、吾人の甘んずる能はざる所なり。（『国防』）

聴衆に対する講演や新聞・雑誌への投稿の原稿という点から考えて、いささか具体性に乏しいとの印象を免れない。

註

① 『予算表』によれば、他に一円以上の義金を求める賛成会員と、実際に移住する移住会員とがある。移住会員については『日誌』『日記』に多数の希望者が記されている。

② 岡本と郡司の関係については阿波学会・岡本章庵調査委員会編『岡本章庵アジアへのまなざし』（阿波学会・2004）第六章第三節（三）、及び

- ③ 『千島日誌』に見える岡本章庵の北方移民論』において言及した。
 岡本は井上円了との交際があったことから、この「林祥院」は井上が哲学館を置いていた「麟祥院」の誤りの可能性が高い。
- ④ 『亜細亜之存亡』(明治33、哲学書院)における宗教侵略については、拙稿「岡本章庵『亜細亜之存亡』について」(徳島大学国語国文学19、2006)において少しく論じた。
- ⑤ 凌霄(四国大学)16、2009。

第二章 『北地国防論』翻刻・訳註

【凡例】

- 一、該本は徳島県立図書館蔵。目録番号五二〇。
- 一、該本は漢字片仮名交じり文で筆記してあるが、漢字平仮名交じり文に改め、また句読点を施した。
- 一、旧字・俗字は原則として新字に改めた。
- 一、墨筆訂正が加えられている。本稿では訂正後の文を翻刻した。
- 一、原本の文字が判読不可能な部分は●で表記した。
- 一、読みやすくするために適宜ルビを付した。

『北地国防論』

吾人は向きに大方の先達諸公に呈せる一書(①)に於て、我内地景況より論じて、北海振起の策を略述せり。今や更に北海道が東洋表面に立つて如何の關係を有するやを明にし、併せて前書の不具を補はん

と欲す。請ふ、言の冗長にして蕪陋なるを呵する勿れ。

見よ見よ。彼の欧州諸国が東洋侵略の勢は、恰も万量の怒濤が涌

々として(②)千里無堤の境を行くが如く、山を抜き雲を払ひ、進んで東印度を巻き、再進して香港・台湾を占め、三進して巨文島・濟州島を略せしに非ずや。既に是を略せり。而して彼等は此蒙爾たる巨文島・濟州島を以て將た何の用に供するか。彼等は是を以て軍艦停泊所と為す。砲兵工廠と為す。而して第四面進撃の根拠と為す。

然らば則(すなわち)第四回の進撃は抑(おそ)も何れの方面に在るか。吾人は彼等の東洋政略の按針者(③)に非ず、又卜筮(④)奇中安倍晴明(⑤)に非ずと雖も、彼等の方針は終始不変、東洋利尽きざれば止まざるを知る。而て其第四進の方面は日清韓の三国にあるを知る。然り。是を以て彼等は東洋に於ける侵略手段の積極たるを知る。彼等の方針、既に斯の如し。然らば則(すなわち)彼等は先づ何れの国に向つて運動を始むるか。支那を先きにせんか、將(は)韓か、日本か。請ふ、地形と便宜とを以て是を判断せん。

地形上より之を見れば、三国の勢は其れ唯兵陣の如きか。清唇たれば日韓齒たり。日韓唇たれば清齒たり(⑥)。清中堅たれば日韓之れが翼たるは、是れ其大小伍置(⑦)、自(おの)から然ればなり。蓋し兵家の兵を用ふるや、必ずしも直入中堅を衝かず、何れか一方薄弱なる点に向ひ、全力を尽して之れに当り、其羽翼を絶ち、而して後胴体に及ぶは敢て疑の容れざるなり。然れども此三国中、何れか強、何れか弱なるかは、容易に判断する能はずと雖も、小者の与(よ)みし易きは自然の理。而して亦薄弱なる点は多く羽翼の辺にありとす。然らば則(すなわち)彼等の運動上、最も便宜にして且(よ)みし易きは、嗚呼、其れ日韓の二国なる哉。二国既に無ければ、支那羽翼なきなり。羽翼なければ鷲鳥と雖も、痴児能く之を撃す。況んや欧州の強兵をや。彼等は尤も狡者なり、老練なり。左れば無謀にも軍刀直入、火牛然として(⑧)天津河流に遡る

を為さず。必ず先づ二国を併し、皆後を安じ、之を根拠として後、徐ろに支那を図るや疑ふ可らず。二国の運命は支那に先だつ。二国滅びざれば支那滅びず、支那滅びざれば東洋保つ可し。日韓の運命亦貴重なる哉。

唯其れ貴重なり。貴重なるが故に其憂や大なり。眼を搏して烏拉山東を見よ。彼等は万里無限の西伯亞曠原を以て練兵場と為し、亞爾泰山脈を以て砲のと為し、以て凶南侵撃の予行演習を為し居るに非ずや。鑾艦(⑩)累々たる東洋艦隊は儼然として黒龍江頭に屯し、猛鷲の国旗を朔風に翻して、遙かに列国の皆を控撃(⑪)するに非ずや。彼の彼得堡より浦塩斯德に至る数千里の長程も将さに黒鉄(⑫)を以て敷き詰め、専ら南方に向つて其蛇足を伸さんとするに非ずや。前門扉後門狼、是を東洋外間の景色とす。

外間の景色、其れ斯の如し。内地の景色は、則如何。

高き屋に登りて見れば烟り絶ゆ。民の籠は衰ひにけり(⑬)。吾人は新年早々此不祥なる歎声を発するを好まず。勉めて屠蘇を飲み、樽を打つて太平楽を謡はんと欲するも、奈何せん。東洋の景色は吾人を駆りて、遂に斯の如く嘯かしたり。豈是れ徒然ならんや(⑭)。

犀を焚て東洋の内幕を照せば、実に断草荒涼たる化ヶ物屋敷なり。東洋全土は殆んど彼等の怪物の舞台と為れる哉。彼等は此茫漠たる台上に於て傍若無人の振舞をなし、或は吼ひ、或は躍り、乱暴極りなり。我が君父を安んずるの殿宅は彼等が酔を貪るの園圍(⑮)となり、我が繁盛なる街衢は彼等が利を射るの市場となり、我が耕すべき田野は彼れが馬蹄の障躍する所となり、我が生命を依頼する草穀は彼れが兵馬の喰ふ所となり、詮し来れば熱沙原頭の民が皆上に流すの汗も、徒らに彼等の喉を濡ほすに過ぎず。カンヂス河畔の烟筒は騰々とし

て黒蛇を吐くも、亦徒らに彼らの食を炊ぐに過ぎず。国亡び家敗れて、臣君を失ひ、子親に離れ、漂蕩頼る所なく、晨に英の苛法に困しみ、夕に魯の猛令に泣く者、其れ幾何ぞ。堂々たる列国独立の勢、其れ何くにか在る。思ひ出づれば哀はれ悲しき東洋なる哉。

幸にして我が日本の如きは浮かず沈まず。此哀なる境中に孤立して得意然たるも、顧みれば我が門前は彼等が第四進の方面に当り、後門は恐るべき魯人の駟声(⑯)を聞く。実に肉を抱きて床穴に坐するの感なき能はず。左れば我政局は夙に対馬島を以て前門の第一防禦線となし、或は分遣隊を置き、或は砲壘を築き、注意周到、更に吾人が容るるの点なきも、独り北門の鎖鑰たる北海道に至りては、其鎖鑰に依て安眠する東洋人すら、否、日本人すら猶ほ一顧盼(⑰)する者なきは何ぞや。吾人は大方の有識者が新聞或は演説等に於て侃々諤々、諸君北門を守れ、守らざる可らずと通論するを見る。然れども實際身を以て其業に当る者に至つては、天下其れ誰か有る。時に或は衣は鼈に至り、袖腕に至り、吸々として寒烟冷霧の間に奔走する者ありと雖も、要するに投機利を射るの狡兎に非ざれば、則空知監獄の囚人に過ぎざるは、吾人の夙夜浩歎(⑱)する所にして、敢て北海振起の策を講じ身を抛つて其任に当り、以て我北門を固ふせんとする所以なり。然り。東洋の藩屏(⑲)を固ふせんとする所以なり。

按ずるに北海道の地たる、北は樺太に対し、東は太平洋に臨み、西は日本海に面し、南は東山道と海峡を隔て、南方より東北に向つて一國を連ね、僅に八十六郡の巔爾たる(⑳)一嶋にして、而して東洋の安危に突するや、実に大なる所以の者は、其位置固とより然ればなり。蓋し東洋北門の敵は唯一魯西亞あるのみ。然れども此魯西亞なる敵が東洋侵略者中の最も強大にして且つ恐るべき者とす。何んとなれ

ば、彼の魯国が嘗て力を西欧に用ふるや、随て戦へば従を失し、遂に黒海中に於て僅かに一のセバストボル(20)を存するの勢に至れり。而るに「たゞ鋒を東するに当りてや、破竹の勢を以てウラルを踰ひ、嘗て為めに征服せられたる韃靼を服し、或は蹂躪し、或は驅逐し、随て戦ひ随て進み、一瀉千里(21)、忽にして中央亞細亞に竜蟠し、亞富汗を噛み、滿州を嘗め、我が北門を叩き、以て東洋の皆を控擧するに至れり。之れを桑榆に失す(22)」と雖、東方に於て此絶大なる新版図を占め、乘勝当さに熟するの気峰を以て、一たび我が北門を衝かば、羸々たる(23)胸壁何に依てか能く支ふることを得んや。恐らくは低を以て水を防ぐに過ぎざるべし。

而るに今や魯の西面に当る欧州諸国は、或は合し或は離し、恰も齊趙盟を渝つて秦業立ち、蜀吳難を構ひて魏謀成るの有様をなし(24)、各其志を中原に伸ばして欧州の覇權を掌握せんと競せり。左る中に魯国は既に志を西欧に絶ち、専ら凶南の策を運らし、傲然として亞細亞大皇帝たらんことを期すれども、今や已むを得ず。此大波瀾を西境一面に受け、揣摩(25)縦横、力を尽して之に当るの時なれば、此波濤の鎮完せざる限りは、魯国凶南の策は暫く中止の姿なるが如しと雖も、強慾な此彼等が進取の志は、地球の運轉は止まるも、五太平洋の水は渴くるとも、到底止まる時はあらざるべし。左れば彼等は臨機応變の運動をなし、干戈を用ひざれば、則老狡なる手段を以て商利を占め、其慾を逞ふせんとするや疑ふべからず。是に於てか彼等は西伯亞内地の鉄道を利用し、日本海を以て良港とし、太平洋上に於て無限の商權を振はんとするや、亦疑ふべからず。然らば、則我が對馬島及び北海道は、彼等が太平洋に出づるの関門にして、其ステーションたるや亦た疑ふべからず。左れば試にここ北海道を以て魯人の有に帰せりと仮

定せよ。彼等は期年ならずして草莽を披かん。曠鉞を採らん。土人を懷けん。艦隊を置かん。鉄道を布くこと、蜘蛛(26)の如くせん。兵馬を養ふこと数万に至らん。然り。忽ち土を巻ひて東山道を席卷せん。然り。忽ち亞細亞皇帝の冠を着けん。嗚呼。諸君の意、如何。豈に是れ窓底讀書の秋ならんや。

汝の室を暖めんと欲せば、先づ其窓戸を閉ざせ。汝の宅を安んぜんと欲せば、先づ其門牘(27)を固くせよ。諸君、若し瓢箪を枕として秋津州裏の月に嘯かんと欲せば、先づ秋津島を安寧にせよ。汝の耕さんとする沃野は彼等の為めに耕され、汝の営まんとする功業は彼等の為めに先登せられ、汝が利せんとする商社は彼等の為めに籠絡せられ、而の後諸君は能く何をか為すや。猶ほ恠々然(28)、彼等の鼻息を以て鼻息をなし、尾を低して其遺利余残を拾ふか。堂々たる帝王の臣民にして彼等の奴隸乎たるは、吾人の甘んずる能はざる所なり。嗚呼。諸君の意如何。

嗚呼。宗教家諸君の意如何。神の有無、或は地獄・極樂の真玄を究むるのみが諸君の本務にも非ざるべし。諸君は知らん。彼の舶来宗教(29)なる者が最我が憂たることを知らん。彼等は日に月に益々繁昌するぞ。千斤の鉄槌も得て壞る可らざる団結を為し居るぞ。而して彼等は其政府の政略機械と為て、舶来せる者なるぞ。耶蘇教、彼れ自身は如何にも真面目を以て衆生を感化するに相違なしと雖、之を利用する彼政府の心こそ恐るべき者なるぞ。而して彼等既に団結せる以上は、将来其運動の方向も亦一ならざるべからず。然らば、則彼等は此一個の団結を以て何れの道に運動するか。或は政治世界に運動するか。或は文字世界に運動するか。將た亦商業世界に運動するか。其他何れの道に運動するにもせよ、彼等は利慾を以て団結する者に非ず。利害を得て破

壊すべからざる団結を為す者ならば、仮令ひ一旦失敗すれば、敢て左程の利害を感じざるべし。而して又彼等の失敗するや、其政府は之を保護するの口実として多少の兵を派遣するか。或は又種々の手段を以て内事に干渉し、隠然一方の勢力を占め、而して後徐ろに全国を瞞着（㉑）するや、古今其例少しとせざるなり。我が宗教家諸君、其れ之を如何んとぞ思ふ。

諸君、請ふ。耳朶を掃つて之を聞け。彼の魯国の侵略機械たる希臘教は既に我が北海道に侵入し居るぞ。而して其函館は彼の希臘教に取つては、実に日本のゼリユサレムなるぞ。彼等は感化院を設けて青年子弟を感化教育し居るぞ。救恤院を置き専ら老幼貧民を救養し居るぞ。蓋し北海道人（㉒）は性来愚直にして、己れ自身が何国の臣民たるを知らず、一旦照々の仁を蒙れば、之を以て一生の帝王と尊戴するに至る。故に或る人は一斗の酒を以て多数の北海道人を臣妾たらしむべしと云へり。蓋し一杯の惠酒、猶ほ能く彼等を感じ殺すればなり。左れば炯眼（㉓）なる魯国は夙に之を察し、敢て金銭と労力とを惜まず、勉めて誠実の仮面を冠つて愚人を感じ服し、其勢力を利用して、遂に多年の宿望を果さんとするや疑ふべからず。左る中に我が日本人は、最、傲慢にして、支那人を見れば咄豚尾と罵り、泰西人を見れば紅髯奴と呼び、殊に北海道人の如きは未だ我々と平等の権利を有せざるを以て、恰も之を人外に置いて禽獸視し、彼れ能く何をか為さんと冷笑すれども、彼等にして一朝魯国の利用する所と為らば、抑も如何の働を為すか。諸君之を記せよ。彼れ若し魯国の利用する所と為らば、勇悍熊の如き土人等は忽ち魯軍の郷導（㉔）と為つて、東洋を蹂躪することを記憶せよ。又記せよ。諸君が鉄石の心腸も微塵と為つて飛散することを記憶せよ。然らば、則、吾人が彼の希臘教の北海道に侵入せるを以て特更に憂とするも、敢て杞人の轍（㉕）にあらざるなり。

是に於てか吾人は日本の為ぞ、東洋の為ぞ、北海道に向つて転●、又先の杖を仗き、以て魯人は搏撃を避けざる可らず。之を避くるの方法は、唯北海道を開ひて鬱然たる美境と為し、北海道人をして單純なる日本人たらしむるの外なかるべし。而して之を行ふが為には、彼の鉄舟山岡公（㉖）及び其他の憂國諸公等の創立に係る大和会なる者は、我が國教を元素として至誠の大義より成り立てる結社なれば、其元素、則ち日本の元氣たる大和魂を以て彼等の悩隨に注入するは結然たる日本の良民を育成するに於て、最、適切なる手段なりと信ず。是に由て吾人は其会の承認を得て、北海道の中心に一分館を設立し、其主義を以て或は懐け或は救ひ、而して又一方に於ては丁壯を集めて兵法を操練し、草荒を開拓して農林を興し、墾鉞を採つて、販路を通し、以て四民の公益を計り、人心の方向を一完して至仁なる王澤に浴せしめば、魯人の手も將に下す所あらざらんとす。吾人の業や其れ斯の如く繁多なり。然れども各其任に当る者に至りては、吾人が同志中既に其当の人あり。又目下孳々として（㉗）研究する者あり。左れば吾人は此等の同志と共に春風雪融くるを俟つて北海に渡り、同心協力、北方の天涯に鬱然たる美域を開ひて東洋の北辰に位し、所謂北方の強者を駆つて傲然たる魯人の鼻柱を折らんと欲するなり。

吾人は職として國を憂ふる者に非ず。唯國を濟ふを以て本意とする者なり。左れば敢て洛陽悲歌の少年を幸んで、空理空論、虚名を搏するを好まず。唯明治世界に立つて、文明の利器を活用し、専ら至誠と實際とを以て運動する者なり。而して又敢て吾が私を営む者に非ず。不肖ながら大方の公益を計らんとする者なれば、有力なる諸君は之を諒し、之を賛け、為めに一朝の供を廢して可なり。然れども吾人の心は淡として水の如く、香として天の如し、賛げざる、何ぞ疾まん。賛けられざる、亦何ぞ止まん。

註

- ① どの文書を指すのか未詳。或は「明治廿四年辛卯十月」と記す『現状』をさすか。
- ② さかんなさま。
- ③ 水先案内人のこと。
- ④ 占いのこと。
- ⑤ 平安中期の陰陽師。神秘化された説話が多く残されている。
- ⑥ 唇亡びれば齒寒しのご事に基つき、相互の利害が非常に密接な関係にある国を唇齒の国という。
- ⑦ 大国と小国とが雑処しているさま。
- ⑧ 火牛の計（牛の角に刀を着け、さらに油を注いだ葦の束の尾に着けて、それを燃やし、夜に敵陣に放つという作戦）の牛のように、の意。
- ⑨ 戦艦のこと。
- ⑩ 自由自在に押さえ取り締まること。
- ⑪ シベリア鉄道の線路をさす。
- ⑫ 『和漢朗詠集』巻下の刺史や『新古今和歌集』巻七の賀歌などに見える「たかき屋に のぼりてみれば 煙立つ たみのかまどは にぎはひにけり」の歌をさす。仁徳天皇御製とされるが、後世の仮託。仁徳天皇が、高殿に登って民の様子を見ると、民が貧しく、かまどの煙が見えなかつた。そこで、三年の間、調庸や身役を中止した所、三年後には、国中にかまどの煙が立ちのぼっていたという故事（『日本書紀』巻一一）による。
- ⑬ どうして何もしないでじっとしていられようか、の意。
- ⑭ ここでは園に同じ。
- ⑮ いびぎのこと。

- ⑯ 「願盼」「願眇」の誤りであろう。ふりかえること。
- ⑰ 大いになげくこと。
- ⑱ ここでは守りの意。
- ⑲ 小さなさま。
- ⑳ セバストポリ。黒海に面するクリミア半島の先端部にある都市。現ウクライナ共和国。
- ㉑ 流れの速いこと。ここでは「あつという間に」の意。
- ㉒ 遅きに失すること。
- ㉓ 豊かなさま。
- ㉔ ともに二国が争っている間に第三国が勝ちを得ることをさす。
- ㉕ 推しはかつてあてようとする事。
- ㉖ 蜘蛛の巣のこと。
- ㉗ 門とそれを閉じる具のこと。
- ㉘ 心がうごくこと。胸騒ぎがすること。
- ㉙ キリスト教をさす。
- ㉚ ごまかすこと。
- ㉛ ここではアイヌ民族をさす。
- ㉜ 明らかにものを見抜く目。
- ㉝ 行軍の案内人。
- ㉞ 所謂「杞憂」の杞国の人がいだいた不必要な憂いをくり返すこと。
- ㉟ 一八三六く八八。幕末・明治前期の剣客・政治家。戊辰戦争の際、勝海舟の使者として駿府に赴き、西郷隆盛と会見して江戸開城についての勝・西郷会談の道を開いた。維新後は侍従として明治天皇に仕えた。
- ㊱ つとめはげむさま。